クールアースいばらき大会 2023 が開催されました

第２回エコ・カレッジ・第１回茨城県地球温暖化防止活動推進員全体研修会を同時開催

～脱炭素チャレンジカップ 2024 予選会～

2023年８月25日、第２回エコ・カレッジ講座の午後の部、第一部でNPO法人藤前干潟を守る会理事の戸苅辰弥氏より、ラムサール登録湿地である藤前干潟の取組みをご紹介、第二部にてクールアースいばらき2022大会が行われました。また、第１回茨城県地球温暖化防止活動推進員全体研修会も同時に開催しました。この大会は、翌年２月に開催される脱炭素チャレンジカップ2024の茨城県代表を決める予選会となっており、2014年に始まってから今年で10年目となります。

茨城県センターでは、毎年クールアースいばらき大会を開催し、この予選会を通して勝ち残った団体を茨城県代表として全国大会へ送り出してきました。脱炭素チャレンジカップは、全国から28団体が選出され、７つの大臣表彰を目指してプレゼン合戦を行うものとなっています。

今年のクールアースいばらき大会も、多くの団体から応募があり、事務局選考によりファイナリストに選ばれた５団体に日頃の取組を発表していただきました。

第一部「ラムサール登録湿地 藤前干潟のセンス・オブ・ワンダー」

NPO 法人藤前干潟を守る会　理事　戸苅辰弥氏

脱炭素社会構築に欠かせない生物多様性の観点から、ラムサール登録湿地である藤前干潟の取組みについてご紹介いただきました。藤前干潟の位置が名古屋市の南西部、伊勢湾の一番奥にあるという説明から始まり、「場所の特徴」、「藤前干潟の生きものとはたらき」に続きました。藤前干潟の生きものに関しては、野鳥たちを大きくみて「留鳥」、「旅鳥」、「夏鳥」、「冬鳥」の４種類に区分されること、特に、今回は旅鳥のシギであるオオソリハシシギに注目。とんでもない渡りをするオオソリハシシギは、長いもので片道約１万 km もの渡りをしており、最新の GPS を使った研究から分かったことは、中国や韓国からアラスカに向かう際、途中で休み、エサをとるため、日本の藤前干潟は、とても重要であるということ。また、長距離の渡りができるヒミツとして、シギの仲間は水鳥でも、水に浮くことができず、海面で休むことができないため、飛び続けるしかないということでした。出発前に食べ、脂肪をため込み、ほとんど熟睡することができず、半球睡眠をしている鳥もいるそうです。太陽や星座などを目印に方向を判断し、地球の磁気も感知しているとのことでした。この藤前干潟の歴史は、1000 年以上前の「あゆち潟」と呼ばれる広大な干潟があり、明治以降、名古屋の海の港として開発が始まり、藤前干潟だけが残ったとのこと。戦後、水質の悪化により豊かな漁業も消えていき、1981 年当時、ごみの最終処分場がいっぱいであり、干潟のような海の浅いところは開発しやすいため、最後の干潟にごみ埋立計画があがってしまいます。しかし、藤前干潟が持つ、様々な価値を証明し、埋立計画を白紙に戻しました。現在の藤前干潟の問題点として、１つ目に渡来する渡り鳥がいずれも減少傾向で原因がまだ判明していないこと、２つ目に港湾開発や家庭排水、工場排水な

どが原因で貧酸素水塊が発生することで生き物が生息できなくなること、３つ目に大雨が降るたび上流からマイクロプラスチックごみが大量に流れてくること。この問題や課題の解決に向け、現在の取組みとして、藤前干潟周辺の生物調査や行政・他団体と連携してのイベント・保全活動(藤前干潟クリーン大作戦実行委員会、伊勢・三河湾の保全)を行い、これからの子どもたちが、干潟の自然にふれることで、自然・環境を大切にする心を育てていきたいとのことでした。

第二部「いばらき予選会 プレゼンテーション」

①ダイキン HVAC ソリューション東京株式会社

ダイキン HVAC ソリューション東京株式会社は、商品・システム・技術を生かして、空気空間に係わる省エネ性・環境性・快適性・安心・安全性の向上などを目指しております。今回は、空調機の増加と環境負荷への影響についての問題提起から始まり、何も対策を取らないと、2050 年に世界の空調機器台数は現状の３倍、消費エネルギーも比例して３倍に増加するため、温室効果ガスによる更なる環境負荷が増大するとのことでした。これから実現していくことは、地域脱炭素化を目指す上では街づくり、建築、設備などあらゆる面で不足要素があるなかで、先行的にグリーンフィールドで都市計画の具体化が進むケースもあるが、足元のブラウンフィールドはボリュームも課題も多く、ブラウンフィールドの脱炭素化を促進し、地域全体での真のカーボンニュートラルを目指したいとのことでした。

②Peach Other 茨城

昨年に続き、４回目のクールアースいばらき大会出場と、パワーあふれる活動を行っており、気候変動について学び、学んだことを伝えるため、日ごろから施設・企業見学や勉強会などの活動を展開しています。

そんな Peach Other 茨城の今年の発表テーマは「環境フェスティバル那珂 2023 開催報告」です。「お互いに助け合ってみんなハッピーになろう」をモットーに幅広い活動を行うこの団体は那珂市でフェスティバルを開催し、今回が２回目でしたが、企業による地中熱や食品トレイリサイクルの取り組みの展示、各環境団体活動の展示、エコ工作教室、エコクッキングや講演会、映画まで盛り沢山で、両日とも大人も子供も楽しめる企画が多く、また、当協会が所有している茨城県内外で大気の汚染状態を把握するために出動している大気環境測定車「みどり号」について動画での紹介をしてくれました。ス

クリーン越しにも元気がもらえるような映像や写真が多く、未来が明るくなる活動報告となりました。

③茨城生物の会

茨城生物の会は、郷土茨城の生物を調査研究し、さらに生物研究者や同行者などの交流及び情報交換できるような環境を提供し、また自然観察会などを通して楽しみながら茨城の自然への関心や理解を深め、郷土の自然環境の保全に努めることを目的に設立されました。また、中学・高校生物発表会などを通して、中学・高校生の生物への興味・関心・研究のより一層の高揚や環境教育および部活動の活性化を図り、研究団体と自然保護（保全）団体の両立を目指しています。今回は、生物多様性をテーマに講演していただきました。活動内容としては、ラムサール登録湿地の茨城県涸沼で発見され命名された、絶滅危惧種 IB のヒヌマイトトンボ保護のための調査活動です。涸沼の調査結果より、消滅予定のヨシ原にヒヌマイトトンボの幼虫生息を確認し、河道改修の涸沼上流部の涸沼ヨシ原を掘削して川の流れを直線にする計画でしたが、河道は曲がったままとし、掘削予定の対岸を補強、ヨシ原を保全しました。ヒヌマイトトンボ再生に向け、2017～2018 年の２年で 2000 本の植栽をし、2020 年にはヒヌマイトトンボの復活が実現されました。他にも、2012 年から千波湖湖岸にビオトープを作る活動へ協力。現在までに湖岸に 10%の湿地を創設し、ワカサギの産卵や在来種の魚の生活保全など生物多様性に貢献してます。茨城生物の会は、2023 年度、年間約 300t の CO_2 削減にも貢献しており、次の 50 年に向けて、貴重な動植物の保全活動、生物多様性の向上や保全活動、温暖化を軽減する脱炭素活動を推進していくようです。

④Love Earth Day

LoveEarthDay は、地球を愛する活動をする日として、小さな小さな、海のごみ拾い活動コミュニティーから生まれた団体です。エコロジカル、循環を意識した暮らし、未来の子ども達の心身の健康、地球の今のリアルな問題、土いじり、食べ物などそれらのキーワードを元に、自分たちで楽しみながらアクションを起こすこと。今できることをできる範囲で情報シェアの場や時には学びや討論の場、そして、様々なご縁の繋がりとともに素敵な輪が広がるようになればと願い仲間が増えていけば嬉しいとのことです。団体を設立したきっかけは、代表のバージルマサヨ氏が 2018 年にアフリカより帰国し、犬の散歩中に見た地元の海岸のごみの量がアフリカよりも酷いことに衝撃を受けたことからでした。親族とともにごみ拾いを試みるも状況は変わらず、地

元の友人と初めてSNSを利用し、イベントを企画。2019年より活動が始まり、30名以上のボランティアが参加し、拾ったごみの量はトータル800袋以上。そして、４年半の時を経て、茨城県内初の世界の「アースデイ（地球のために行動を起こす日）」に合わせた環境イベントとして、「アースデイウバ！ひたちなか2023」を初開催。来場者数は1000人を突破し、自然体験（シーカヤック・磯遊び）に海のごみ拾い、ヨガ・音楽・ヴィーガンフードに保護犬の里親譲渡会など、地球愛が詰まった楽しいイベントで大盛況だったそうです。今後の活動としては、ビーチクリーンの継続、アースデイウバ！2024 の開催、環境にやさしいワークショップ＆イベントの開催、SNSによるエコ情報発信をやっていきたいとのことでした。

⑤ボーイスカウト水戸１団カブ隊

ボーイスカウト茨城連盟で組織されているボーイスカウト水戸１団カブ隊は、青少年がその自発活動により、自らの健康を築き、社会に奉仕できる能力と人生に役立つ性能を体得し、かつ、誠実、勇気、自信および国際愛と人道主義を把握し、実践できるよう教育することを目的としています。ボーイスカウトの教育が他の青少年団体と異なるところは、「ちかい」と「おきて」の実践、班制教育、進歩制度、野外活動を取り入れていることです。どんなときも、どんな場合でも、すべての活動が「ちかい」と「おきて」の実践が基盤となり、「ちかい」は自分自身に対して誓うものであり、「おきて」は毎日の生活のものさしとして自分の行動を律するものとしています。

今回、この団体が挑戦したことは、まず、マッチを使って上手に火をおこす方法を体験することでした。マッチは３本だけ！麻縄を速く切るには？という内容でした。子どもたちが麻縄を切るために試行錯誤しながら火を起こす姿は、映像からでもとても記憶に残るものでした。続いて、火のランタンを作って、灯りを点そうという内容です。こちらも映像となっており、ランタンには竹を使用するのですが、子どもたちでは竹を切るにも固いため、苦戦しており、お父さん方に協力してもらいながらランタンも無事、作成することができたとのことでした。子どもたちの感想としては、「テレビやゲームがない環境でも、みんなで協力することは楽しいこと」、「虫や鳥を観察する機会があること」、「電灯がないけど、ろうそくの灯りでも生活できること」、「手作りしたものは愛着がわき、大切に使おうという気持ちがわいた」など、子どもたちにとって、新しい発見や知識、経験を得る事で、とても有意義な時間を過ごしていたことが感じられました。

５団体の発表が終わり、投票集計をしている間にスペシャルゲストとして、脱炭素チャレンジカップ 2020 大会で文部科学大臣賞＆オーディエンス賞をW受賞した「劇団シンデレラ with 逆川こどもエコクラブ」を代表して、劇団シンデレラ座長のフローレスともこ氏に講演していただきました。劇団シンデレラは「夢と希望と冒険と自然とともに生きる」のテーマを掲げ、劇場公演やビジターセンター、地方の保育園、環境イベントなどで公演しています。幼児～シニアまで幅広い年齢の 30 名で活動し、メンバーで意見を出し合い、ミュージカルを作っています。また、どんな場所でも自然の大切さを伝えられるように、自然とふれあう活動を通して、「自然環境」や「生物多様性」の理解を深め、レンジャーの困っていることや、素敵なことの取材をして台本も衣装も自分たちで作り、ミュージカルを見てくださった方たちに「身近な自然に目を向けること」、「自然を好きになること」、そして「気づくこと」のきっかけになるミュージカルを目指しています。

結果発表で、会場は大いに盛り上がり、今回初めてエントリーされた LaveEarthDay 様がクールアースいばらき大会 2023 の最優秀賞を受賞しました。

脱炭素チャレンジカップ 2024 に、茨城県代表として推薦しました。